

潟語り

(十七)

文・小西 一三
絵・小西 由紀子

出稼ぎと潟の漁 その②

前回の出稼ぎの話に続き、今回は主に潟での漁について羽立の安田春雄さん(七四)に語ってもらいました。

大漁続きで忙しかった、台風の後

大きな魚を捕る「雑建網」が忙しくなるのは秋になってから。六、七、八月の暑い間は網を入れる準備の期間。九月になってから網を入れたもんです。特に台風の後など、シケの後は魚がよく動くということで暗いうちから船を出したもんです。

私が世話になった児玉茂雄さんは大した腕のいい漁師で、午前一時、二時に出港しても、びたっと目標の建網まで船を走らせたもんです。まっ暗な潟の上で「山たて」をしなから船を動かしたんですな。

児玉さんは私より二歳先輩でしたが、小さい時から遊んでもらっていたもんだがら船の上では「兄、兄」と呼んでいました。でも陸に上がれば回りに人もいます。私は使われていましたから、そんな時は「父さん、父さん」と呼んだものです。児玉さんは我々のような使用人にも決して威張らず、「本当に頭がよく、おとなしく、静かな人」でした。

台風など大きなシケの後はやっぱり大漁で、一つの袋網

の中に一メートル近くのウナギが一〇本以上も入っていたことがあった。網の中で太いウナギがヘビのようにからまってヌルヌル動いている。あれは本当に見事なものであったな。またシロメが大漁の時は、シロメが網の上をビョンビョン跳んで逃げて行ったもんです。
私は補償金をもらった昭和三十五年頃に船を下りて、田んぼや日雇いの仕事をするようになりました。でもやっぱり潟の漁の方が良かったすな。涼しかったもの。
私はまったく学問はねえども、歌のようなもの、書いてみました。

「思う今 あの旬の魚 幻か」

「八郎潟 美田に換えて 米余り」

